

### (3) 信仰集落としての特徴

#### 1. 宿坊を持たない社家・社人集落としての特徴

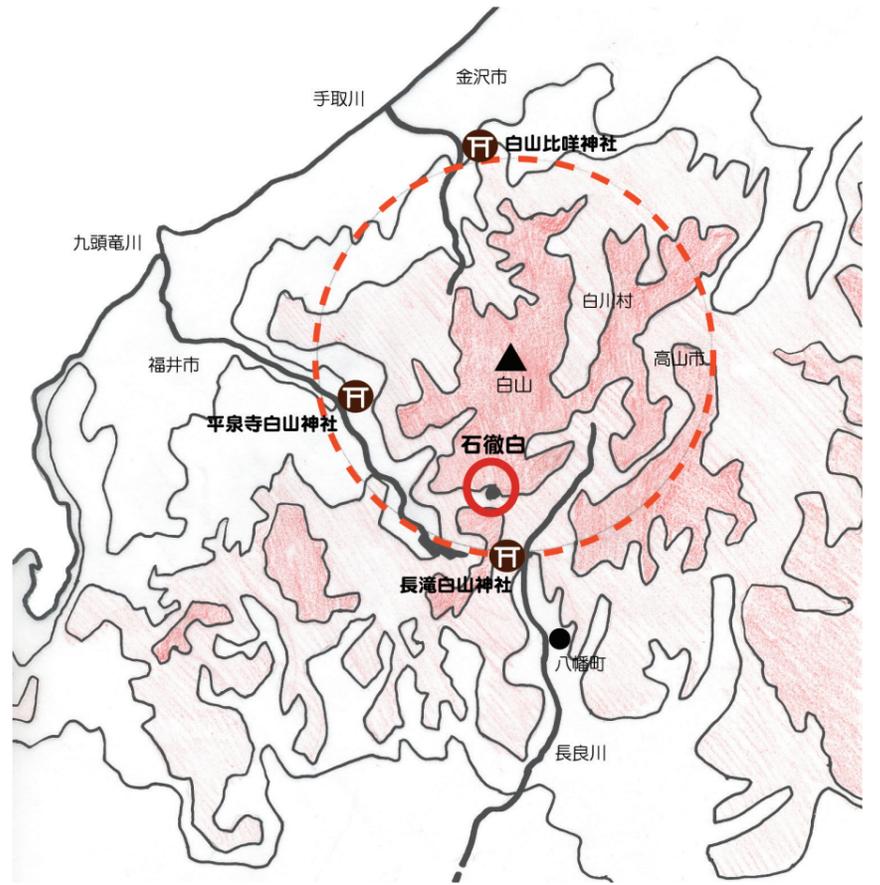
石徹白地区は白山信仰の拠点であり、白山信仰全盛期には、美濃馬場（みのばんば）がおかれた長滝地区とともに多数の参拝者が通過した地区である。聞き取り調査等によれば、多くの民家が彼らを宿泊させている。

全国の多くの修験道山麓にある集落では、宿坊を経営した結果、民が大規模化し、集落の都市化が進んだ（参詣道や成形地割りの整備などが行なわれた）。

けれども、石徹白地区は、農村としての民家や集落の形態を崩すことなく今日にいたっている。

石徹白地区は、白山中居神社の社家（しゃけ）・社人（しゃじん）集落であり、かつては村の構成員が全て何らかの形で白山神に奉仕するなど、集落としてのまとまりが重んじられたものと思われる。また、山に囲まれた地形や、土地の広がりやに制約のある耕作条件は、物理的に村の拡大を許さず、適正規模の人口、戸数を保ち続けてきたものと思われる（村が広がらないようにこうした土地を選んだと言う伝承もある）。

石徹白地区の集落景観や規模には一定のまとまり感があり、社家・社人集落としての風情を今日まで保ち続けている。



#### 2. 白山が見えない中居（なかい）集落

白山信仰の三馬場（ばんば）と禅定道（ぜんじょうどう）を見てみると、加賀、越前の禅定道はそれぞれ白山に谷筋から登拝するルートであり、中居からは白山山頂を遥拝することができる。

それに対し、美濃側は白山の尾根筋からアプローチする道筋であり、石徹白はその途上にある。そのため、石徹白は「白山の見えない白山信仰集落」となっている。

しかし、標高としてはもっとも白山に近い上、白山が見えない事が逆に作用して、白山に対する期待感を高める効果をあげていると思われる。

こうした面で、石徹白地区は、三馬場とその周辺の集落と比べても、大変特徴がある地区である。



越前馬場（ばんば）  
平泉寺白山神社  
写真提供：曾我孝行氏



写真提供：曾我孝行氏  
加賀馬場（ばんば）  
白山比咩神社

#### 3. 信仰を物語る景観要素

修験道の山麓集落には、信仰を物語る景観要素が良く見られる（羽黒山麓集落の注連縄（しめなわ）、英彦山の石畳の参詣道など）。

石徹白地区の場合、一見通常の農村集落に見えるが、よく見ると白山信仰に関連する景観要素があることがわかる。

例えば、地区内の古道は、以前は石が敷き詰められていたようで、現在でも一部でその姿が見られる。それぞれの民家は2階・白山側に神様の部屋が置かれ、ここはどの家も開口部を持たない板壁とされている。（ただし、こうした事柄は解説されることにより理解でき、「目に見える」ようになる。）

地区の所々には追分があり、みちしるべ（道標）が見られる。また、石徹白を通過する古道は緩やかなアップダウンを繰り返し変化にとんだ風景を生み出し、いくつかのポイントは眺望点となっている。

これらは、信仰の集落として、いろいろな地域の人々が通る交通要衝であった事を表すとともに、白山に向かう道筋の景観的な演出がある程度はかられていた事が推察できる。



大師堂近くから



上在所への往還



道者（どうじゃ）道



威徳寺方面を見る

